

平成28年度 教育事業
青少年教育施設ボランティア養成講座

ボランティア活動に必要な知識や技術を、今後参加者が活用できるように工夫して演習を実施しました。また、参加者がボランティア活動を通して自己実現を図れるよう、ボランティア活動の意義について学びを深める機会を設けました。

1 事業実施までの経緯

昨今、青少年にボランティア精神を普及し、生涯を通じて様々な場面でボランティアとして活躍できる人材を育成する必要性が指摘されている。この事業は当機構のボランティアのみならず、広く青少年教育に携わる人材の育成を目的としており、これまでボランティアに参加してきた参加者にとっては学び直しとスキルアップを、ボランティアに興味を持っているが経験のない参加者にとっては基礎を学ぶ場を、そして、両者の交流の場を提供すべく、この事業を企画した。また、昨年度国立阿蘇青少年交流の家で開かれた「ボラシャッフルキャンプ」に参加した法人ボランティアからの要望を受け、ボランティアの自主企画を増やす方向で企画内容を検討した。さらに、これまで当交流の家で活動する法人ボランティアは高校生が中心となっていたため、前年度から大学への広報を積極的に行った。

平成28年度 国立大洲青少年交流の家 教育事業

先着 20名 青少年教育施設ボランティア養成講座

2016年 6月18日(土)～19日(日)【1泊2日】

会場：国立大洲青少年交流の家（愛媛県大洲市）

参加費：3,500円（参加費4名、教材費、施設代等）

対象：ボランティア活動に関心のある高校生・大学生・社会人など

養成講座を受けると・・・

- ①資格が取れます！（機構のボランティア資格、普通教員講習修了証）
- ②「社会人基礎力」が身につきます！（詳しくは裏面）
- ③ボランティア活動に交通費のサポートがあります！

STEP1 2日間のボランティア養成プログラム受講

STEP2 青少年教育振興機構のボランティアに登録

STEP3 全国28ヶ所の機構施設でボランティア可能

体験の風をおこそう

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

2 ねらい

国立大洲青少年交流の家等で実施される教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助を行うボランティア人材を新たに育成するとともに、自ら立案および運営を行える企画を取り入れることで既に活動している法人ボランティアの自主性を養成する。

3 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

4 後援 愛媛県教育委員会・大洲市教育委員会・愛媛新聞社

5 期日 平成28年6月18日（土）～19日（日）【1泊2日】

6 場所 国立大洲青少年交流の家

7 参加人数 受講者27名（内訳：高校生11名・大学生16名）
法人ボランティア6名

8 講師 山崎哲司氏（愛媛大学教育学部教授）
柴崎あい氏（愛媛ボランティア学習研究会事務局長）
大洲地区広域消防事務組合消防署員
国立大洲青少年交流の家 職員

9 日程・内容

(1) 日程

		10:00	10:30	11:00	12:00	13:00	16:00	17:30	18:30	20:00	21:00	22:00	22:30
18日 (土)	受付	開講式	ボランティア活動の技術Ⅰ (アイスブレイク)	昼食・休憩	安全管理 (普通救命講習)	青少年教育	夕食・休憩	ボランティア活動の意義	入浴・休憩	青少年教育施設におけるボランティア活動Ⅰ		就寝	
		6:30	9:00	10:00	13:00	14:00	14:30						
19日 (日)	起床つどい朝食	青少年教育施設の現状と運営	ボランティア活動の技術Ⅱ (野外炊飯)	青少年教育施設におけるボランティア活動Ⅱ	閉講式	解散							

(2) 活動内容

【概要】

本事業は、独立行政法人国立青少年教育振興機構における法人ボランティア養成共通カリキュラムに基づき、2日間を通してボランティアについて意義をとらえ直し、必要な技術について万遍なく身につけられるように計画した。1日目には講義を中心としつつも演習やディスカッションの時間を取り入れ、参加者間の交流も図った。2日目には具体的な活動時間を多く確保し、体を動かしながら前日学んだ知識が生かせるよう、プログラムを工夫し実施した。例年、新規受講者と法人ボランティアが交流する情報交換の時間を1日目夜に設定しているが、これを法人ボランティアの自主企画とした。講座の前日に法人ボランティア6名が集合し、どのような形で当交流の家におけるボランティア活動を紹介し、かつ参加者同士の交流を図っていくか話し合った。

演習①ボランティア活動の技術Ⅰ「仲間作りの手法」(60分)

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

開講式の後、ミュージックルームに移動し、当交流の家職員の指導で、アイスブレイクが始まった。今回の受講者は半分が3月のボランティアフォローアップセミナーに参加しており顔見知りであったが、大学に入学したばかりの受講者や高校生受講者は初顔合わせである。職員の指導で参加者全員が取り組むアイスブレイクが行われた後、ペアやグループで取り組むグループワークへと移行した。法人ボランティアは各班に入り活動を促しながら、指示が理解できていない受講者を助けつつ、互いに交流を深めた。それぞれの活動の後には職員からねらいと注意点が紹介され、参加者は熱心にメモを取りアイスブレイクへの理解を深めた。



演習②安全管理「応急処置危険予知」(180分) 講師：大洲地区広域消防事務組合消防署員

消防署員2名と女性消防団員2名の指導により、普通救命講習Ⅰの内容である心肺蘇生やAEDの使用方法を学んだ。参加者は5名前後の班に分かれ、それぞれに法人ボランティアがサポートとして加わる形で演習は進んだ。この講座は普通救命に加えて、怪我の処置には不便な屋外における応急手当の方法についても学べる内容で行われた。骨折部位に新聞紙や雑誌で椀木をする方法や、サランラップを使って体を椀木にする方法、応急担架の作成方法や担架を準備できない場合の傷病者運搬方法などを、参加者は役割を交代しながら体験して学んだ。参加者には後日、普通救命講習Ⅰの受講終了証が送付された。



講義①青少年教育の課題「青少年教育」（90分） 講師：山崎哲司氏（愛媛大学教育学部教授）

当交流の家での研修支援活動や企画事業は、体験による学びを重視しているが、近年では学校教育においても体験型の教育手法が広がりつつある。山崎教授は講義の冒頭で「経験・体験からの学び」について定義を紹介し、実際に体験してもらうため参加者に4人前後のグループを作るよう指示が出された。参加者はそれぞれが動物や恐竜のシルエットが印刷されたプリントを手渡され、その大きさを順番に並べるのであるが、その手掛かりになる情報を山崎教授が持参した化石を触り、大きさを実感しながら入手するといった形で進められた。講義の最後に、ボランティア活動自体も体験でそれぞれの学びは個人によって様々であること、体験活動を充実させるためにお互いの協働が重要であることが紹介された。



講義②「ボランティア活動の意義」（90分） 講師：柴崎あい氏（愛媛ボランティア学習研究会事務局長）

講義の冒頭で「ボランティア活動の4原則」と「ボランティア活動の目的」について問いかけがあり、参加者はこれまでのボランティア活動をそれぞれふりかえった。続いて、4月に発生した熊本地震におけるボランティアをめぐる報道が取り上げられ、ボランティアが直面する問題について5人前後の班に分かれて議論し、法人ボランティアはそれぞれの班に入って議論をうながし、意見のとりまとめを行った。各班からの意見発表が行われた後に柴崎氏から二つの助言があった。一つは人を活かすためのボランティア活動にも人を傷つける一面があることを前提として活動してほしいこと。もう一つは「ホットハート」と「クールヘッド」を合わせ持って活動をおこなってほしいことである。最後にボランティア基礎力の考え方が提示され、「自他共生力」「内発的活力」「社会貢献力」「課題探求力」ボランティア活動を通して社会を作るとともに自分を作してほしい等メッセージが送られた。



講義③「青少年教育施設におけるボランティア活動Ⅰ」（60分）

講師：国立大洲青少年交流の家職員、法人ボランティア

例年は法人ボランティアと受講者との情報交換会を実施していた就寝前の時間を使い、法人ボランティアが交流の家でのボランティア活動について紹介する時間とした。進め方については前日に集まった法人ボランティアが話し合っており、それぞれが交流の家でのボランティア活動を通して自分がどのような変化を感じたかそれぞれの言葉で語り、受講者は真剣に耳を傾けた。紹介が終わった後は、受講者も交えて自己紹介の時間となり、アイスブレイクでも用いられる「4つの窓」を使った方法で、ボランティアに関する今後の目標についても意見を交換した。



講義④青少年教育施設の現状と運営「青少年教育施設の現状」（60分）

講師：国立大洲青少年交流の家ボランティアコーディネーター

受講者がボランティア養成講座のテキストとして購入している「入門：子供の活動支援と青少年教育ボランティア」を使用して講義を行った。受講者は現在学校教育を受けている立場であり、社会教育施設の位置づけや体験活動が青少年の成長に与える影響についての講義は、少し分かりづらい様子であった。

演習③ボランティア活動の技術Ⅱ「野外炊飯」（180分）

今回の受講者は大学生が多かったため、少し凝った料理にしたいと考えてダッジオーブンを使ったパエリア作りとした。活動の前にKYT（危険予知トレーニング）を実施し、安全に活動するための注意点を確認しながら調理を進めた。前日の講義や意見交換を同じ班での活動に設定したため、作業を通してより一層親密度が高まる様子が確認できた。下準備の担当とかまど担当に分かれて調理を進め、どの班も時間内にパエリアを炊きあげることができた。最後にダッジオーブンの手入れについて職員から指導があり、それぞれの班で入念にシーズニングが行われた。



講義⑤「青少年教育施設におけるボランティア活動Ⅱ」（60分）

機構の法人ボランティア制度について職員が説明し、ボランティア登録手続を行った。養成講座の後に予定されている事業について、どのようなボランティア内容を行うのか紹介し、参加を促した。閉講式に先立って、各班で法人ボランティアを交えて各班で2日間の感想を述べ合い、ふりかえりを行った。

(3) 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

*満足：66.6% *やや満足：33.3% *やや不満：0.0% *不満：0.0%

- 講義を受けるだけでなく、実際に仲間とふれあったり活動をしたりするなど実践を通すことで、今後に生かせるものになったと思います。
- ボランティアは人のためにすることだと思っていたけど、自分も成長できるなど改めて思いました。大学4年間を通して自分自身を成長させることができたらいいなと思うし、また同時にそれが他人のためになったらいいなと強く思う。
- ボランティアの意義について再確認できるいい機会となりました。普通の学校生活ではなかなか知ることのできない内容を凝縮した時間で学べてとても良かったと感じます。
- 楽しみながらボランティアについて学べたので良かった。色々な人と話せば話すほど、様々な視点から物事を考えることができた。

(4) 成果と課題

愛媛県は高校生のボランティア活動が熱心な土地柄であり、戦後の戦災孤児への支援活動から始まった取り組みが影響していると言われている。当交流の家のボランティア養成事業もこれまで高校生が多く受講してきたが、自主企画を行うボランティアを育てることが難しい状況であった。今回の養成講座で大学生の法人ボランティアを増やしたいと考え、大学への訪問広報を積極的に行った。結果として受講者27名中16名が大学生の受講者であった。昨年度の受講者27名中、大学生は3名にとどまったことを考えると、この養成講座に向けた広報活動は一定の成果を残したと考えられる。この講座で法人ボランティア登録をした大学生に、長く交流の家のボランティア活動に携わってもらい、いずれは法人ボランティアの自主企画を実現させたい。また、昨年度の受講者は中予および南予地域に偏っていたが、今回は東予地域から高校生が2名受講した。今後も参加申し込みがあった高校に重点的に広報を行い、安定的に受講者を確保できればと考えている。

一方で、今回の受講者アンケートの結果は昨年度の満足度から下がっている。昨年度は85.2%が満足と回答しているが、今年度は66.6%と20ポイント下回った。大学生の受講者を十分に満足させられる内容に達していなかったことが予想される。来年度に向けて、より深い学びが得られるように講座の企画を練りたい。

(担当：企画指導専門職 来田 淳)